二次元ぷち文庫
2D PETIT POCKET NOVELS
魔斬姫外伝2
―退魔師たちの乳淫獄―
綾守竜樹
表紙／ここのき奈緒
試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『退魔師たちの乳淫獄　魔斬姫外伝２』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ『魔斬姫伝　退魔師たちの淫獄』『魔斬姫伝２』、二次元ぷち文庫『魔斬姫外伝 御剱家秘録』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただきますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

魔斬姫外伝2
—退魔師たちの乳淫獄—
綾守竜樹
表紙／ここのき奈緒
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

九条院法子（くじょういんのりこ）

女性だけの退魔組織「紅薙姫（クサナギ）」に所属している日本刀遣い。潔癖な性格。

シャドウ

淫魔。女の精を吸うことを悦びとする。

鷹城八雲（たかしろやくも）

法子の先輩にあたる女退魔師。美貌・実力ともに「紅薙姫」最強と謳われているが…。

「……いつまで……続けるつもり？」

荒い息をしながら睨みつけた。

「……こんなことをされたって……私は絶対に……屈しないわ……」

私は退魔組織「紅薙姫」の一員。人知れず魔を斬り続ける女狩人だ。ミスを犯せばどのような運命が待ちうけているか、嫌というほど目にしてきた。いや、見るだけでなく実際に——。

首を振る。

とにかく、私たちが戦っている相手は「淫魔」である。人外の器官と性戯を使って女を犯し、その精気を搾りとる化け物だ。これまでも数知れぬ戦友たちが、女に生まれたことを後悔させられてきた。

「……さすがは九条院法子、八雲の一番弟子ですね」

「私はともかく……八雲先輩を……呼びすてにしないで欲しいわね……」

シャドウと名乗った淫魔は、いやみったらしく拍手を響かせた。

「これほど責められても、まだそんな強がりを言えるとは……双乳の大きさだけでなく、気丈さも受けついでおられるようで」

「強がりなんかじゃ……ないわよ……」

この薄暗い地下室に監禁されて、もう二日になる。その間ずっと、私は「触手」のお世話になった。露わすぎるところと秘めたところを嬲られて、女体の裡に眠るものを穿りだされた。昼夜問わず、おなかの底から叫ばされた。

あの刺激、あの気持ちよさ。

淫魔の触手はヌメヌメなのにザラザラで、粘膜の包容力と骨の貫通力を兼ねそなえてい

えっちシーン試し読み ここからスタート!

た。ひとたび絡みつくや肌の毛穴や粘膜の襞に快感をこびりつかせ、いつまでもいつまでも狂わせた。

正直に告白すれば、私は何度も淫獄に引きずりこまれた。身体はすっかり、触手の虜に落ちていた。さらには心も、「この気持ちよさに溶かされてもかまわない」と思いかけさえした。けれど陥落の寸前で、ある退魔師の姿が私を支えてくれた。

鷹城八雲（たかしろやくも）。

私たちの先輩で、現在最強と謳われている女退魔師である。容姿、態度、性格のすべてが凛々しく、まさに日本刀のような方だ。その勇猛な戦闘方法といい、一匹狼的な生き方といい、私には憧れの対象だった。

八雲先輩が絶対、助けに来てくれる。

この部屋へ連れこまれるまえ、私は救難信号を残している。先輩ならここを探りだし、このシャドウを斬ってくれる。冴えないサラリーマンに擬態したこいつを、血祭りにあげ

てくれる。

その確信が、私を淫欲の魔手から護った。ともすれば快楽へ溺れそうになる心を叱咤して、敵愾心と矜持を維持させた。

「……早く私を……殺すか、放すかすることね……でないと、後悔するわよ……」

私はチラッ、とドアを見やった。赤錆だらけの金属板を、穴が開くほど見つめた。

「……でないと」シャドウは目線の意味を汲みとって、「斬魔の姫君たちが救出に雪崩れこんでくる、と?」

「ええ」

「なるほど、それが強がりの正体ですか」

「だから!　強がりなんかじゃないわ」

「……法子さんは聡明ですが、女性ですからときどき夢を見てしまいますよね」

淫魔はとても優しく微笑んだ。

「お節介とは思いますけれど、私が目覚めのキスをしてさしあげます。あなた方、狩人を気取っている戦姫たちの……牝の真実を教えてあげましょう」

甘ったるい口調で言い、鉄扉の向こうに消えた。

「……真実、ですって……」

一人残され、私は両肩で息をついた。全身を覆っている汗と粘液が流れて、性感をささくれ出させた。

いまの私はドアと反対側の石壁に磔られ、ほぼ全裸に剥かれている。全身スーツであるはずの念装甲膜は、肘と膝の先にしか残っていない。触手たちに女性の部分を奪いとられ

て、あられもないX字を描かされている。

監禁部屋はレンガ大の石を組みあげたもので、まるで巨大なカマドだ。私の右手側の壁には雰囲気とそぐわないスクリーンが、左手側には映写機が置いてあった。レンガの境目からは、紫色の触手が突然変異したキノコのように這いずりだしていた。

きっと、この館のどこかに菌巣みたいな腐肉の塊が眠っているのだろう。低級淫魔のなかには、独立した生物のかたちを取ることさえできないヤツらもいる。この触手どもは、そいつが伸ばした捕食の網にちがいない。

部屋には照明器具の類もなく、四隅のロウソクがかろうじて視界を届かせていた。換気の悪い空間には匂いと湿気がこもり、私は自分が漏らしたものをつねに自覚させられていた。

「……絶対、助けに来てくれる……」

この二日間で、初めて知った。私は俗に言う「潮噴き」をしてしまう女だった。気持ち

よさが高まりすぎると下腹部が張ってきて、無意識のうちに屈伏の水芸を披露してしまうのだ。

「……八雲先輩なら、あいつに勝てる……」

奥歯を噛んでいると、鉄扉が勢いよく開けられた。

「……待たせたな」

シャドウが、イヌ用の鎖を手に戻ってきた。ジャラジャラと鳴るものの先を見たとき、

「……ッ！」

私は目を開けたまま気絶していた。視界と思考のあいだで、深刻すぎる肉離れを起こしていた。

「つ、ついたの？　八雲、セックスできるの？」

四つんばいで入ってきたのは、現在最強の女退魔師だった。生ける日本刀はシャドウの足に頬を擦りつけ、飼い犬の媚を振りまいた。

「ああ、たっぷり可愛がってやる」淫魔は私の顔を見て、ニヤリと笑った。「いやというほどヨガり狂わせてやるよ」

「く、狂わせて！」

先輩が舌ったらずに叫ぶ姿を、私は呆然と見つめた。

「八雲を、ご主人様の牝にしてっ！」

八雲先輩は、真っ赤なバンドと金の鎖輪を組みあわせたボンデージを着せられていた。三センチ幅のエナメルが首や胸を締めあげて、屈強な女戦士に虜囚の哀れさをまとわせた。

「おまえはとっくの昔に、俺の牝だよ……その馬鹿デカい乳房をブラ下げたときから、牝

牛に堕ちると決まっていたんだ」

「そうです、そうでした……で、でも」先輩はシャドウの革靴に接吻して、「もっと！もっと牝にして！」

拘束の帯は筋肉質な腕や日本人離れした長さの肢にも巻きついて、白い肌に赤の幾何学模様を描いている。さらに腰骨あたりの金輪から二本のバンドが下ろされ、陰部を左右から挟みあげている。足の付け根をなぞっているそれは、裏に回されて尻たぶにも喰いこみ、谷間の暗がりを広げている。

「ふふふ……おまえは二日前から裸になって、四つんばいで歩いている。床の金皿にブチまけられた飯をイヌ食いし、居間のどまんなかで排泄しながら暮らしている……これより下があると思うのか？」

「……あるんでしょう？」赤い舌を伸ばして、靴の甲を舐め始めた。「や、八雲はもっと牝にされる……いやらしくされるんでしょう？」

先輩は濡れた舌をチロチロと這わせ続ける。イヌが尻尾を振るように、ムッチリとしたお尻を揺らす。明らかに意図的な、娼婦の手管だった。たくましい内腿には透明な液体が伝いおち、ロウソクの蛍火を反射して輝いていた。

「ああ。おまえは、どうしようもないマゾだからな。畜生以下の牝になれるさ……おまえを二度と這いあがってこられないドン底まで堕としてやるよ」

「堕として！」心底、嬉しそうな声だった。「マゾ牝の八雲をもっと！　もっともっと堕として！」

先輩は衣装らしからぬ衣装を着ていながら、ブランド物のハイヒールを履いていた。それとバランスを取るように、両手の爪にも真っ赤なマニキュアを塗っていた。さらにバタフライ型の眼帯、これまた血色の覆いをつけて、視界を放棄していた。

「……ふふ、ふふふ……ふはははは！」

シャドウは硬直している私を見て、笑い声を響かせた。狭苦しい監禁室は、淫魔の凱歌

をいやというほど反響して、私をますます失語症に追いやった。

マゾ牝の八雲。

先輩は自ら、そう告白したのだ。誰よりも淫魔に恐れられている女狩人が、自身を変態性欲者だと公言し、しかもそれに陶酔を覚えているのである。

「ははは、よく言った！　なかなか効果的だったようだぞ」私の顔から先輩の後頭部に目線を戻して、「さあ、ご褒美だ……どこを虐められたい？　おまえの好きな場所を選ばせてやる」

先輩は顔をあげた。エナメルバンドに縊りだされた乳房が、風切りの音を立てそうな勢いで揺れた。人差し指の先くらいはありそうな乳首の先から、玉の汗を振りとばした。

「……はいっ、ありがとうございます！」

イヌのチンチンのポーズを取り、長すぎて持てあましているような両足にM字を描かせ

る。太腿の肉とふくらはぎのそれが押しあって、オトナの女らしい充実感を漲らせる。そのまま両膝を開き、股間をほぼ一八〇度になるまで割ってみせた。足の切れこみから陰部のありさまにいたるまで、包みかくさず披露した。

先輩の下腹部には、伸ばし放題の陰毛がびっしりと茂っていた。いつから手入れしていないのだろう、恥丘から胴底にかけての曲面は真っ黒で、生クリーム色の肌と著しい対比を為していた。

まるでその部分、女性器のなかに悪しきものが詰まっているような、おどろおどろしい印象だった。絡まりあった縮れ毛は汗やほかの体液を溜めて、独特の甘酸っぱい匂いをくゆらせた。

「や、八雲はマゾ牝のくせに退魔師なんてやっていたから、いやらしい思いでいっぱいの……」両手で乳房をすくいあげ、捧げ物のように掲げる。「この巨乳を虐めてもらえませんでした……ほ、本当は淫魔の皆様に、かたちが変わるまで揉まれたり、吸われたりしたかったのに」

よく、「絶望すれば心が凍る」と言う。そして何も感じなくなってしまう、と。

そんなの嘘だ。

だって私の心、堕ちた女戦士の姿を見せられて絶望しているそれは、もう凍っているのにもかかわらず冷えていく。足元の地面が音もなく割れて、身体ごと底の見えない深淵に落ちていく。

淫魔の皆様。

私が知っている「鷹城八雲」は、誰よりも淫魔を憎んでいた。淫魔に犯され、嬲りものにされた過去があるから、単なる使命感を超えて任務に励んでいた。

『あいつを殺し、奪われたプライドを取りかえす……私はそのために、光の世界を諦めたの。女であることさえ捨てて、斬魔刀を手にしたのよ』

私が落ちこみ、退魔師を辞めようかと思いなやんでいたとき。八雲先輩は、二度と思

いだしたくないはずの恥辱体験まで語って、私を慰めてくれた。「ともに戦う刀姫として、あいつらに目に物見せてやろうよ」。そう引きとめてくれたのだ。

だから、私は戻ってこれた。あのとき誰にも言えない肉の傷を負わされたにもかかわらず、戦う女に返りざけたのだ。

それなのに。

私に希望を与えてくれた女（ヒト）、私の崇める復讐の女神（ネメシス）が、仇敵に「様」を付けている。「復讐鬼」のたたずまいはただの仮面で、本当は淫魔たちのまえに跪き、その大きすぎる胸を弄ばれたかったのだ、と涙を浮かべて訴えている。

「や、八雲はあさはかで、意地っ張りな牝でしたから……シャドウ様に調教していただくまで、女盛りのカラダを夜泣きさせていました……ど、どうか、淫らな疼きが鎮まるように、この……」さらに両手を掲げる。乳房の付け根をさらし、そこに溜まった汗を照からせる。「このマゾおっぱいを嬲って、いやらしさを搾りだしてください！」

きっと何度も練習させられたのだろう。先輩は口上を述べるだけで興奮し、窮屈さの中心にある裂け目から女の蜜を滲みださせた。どうしようもなく匂うそれは、ツルリとした尻たぶを垂れおちて石畳の隙間を埋めた。

「なんだ、また胸か？　昨夜あれほど嬲ってやったのに、まだ足りないのか？」

「足りないんです！」間髪入れず、だった。「あんなに愛していただいたのに、朝になるとまた、して欲しくてたまらなくなるんです……」

「まったく底無しだな」鼻で笑って、「先週は、あれで満足していただろう？　そもそも乳責めだけであんなにイク牝は、日本じゅう探しても」

シャドウは意味ありげに私を見た。

「あと一人くらいだぞ」

「ご、ごめんなさい……八雲のおっぱいは……そ、底無しのマゾだから……欲求不満がお

さまらないの……ドンドンいやらしくなっちゃうの……」

聞くにたえない台詞を吐きながら、両手の指を蠢かせる。伏せた盃みたいな乳暈を人差し指と中指で挟み、折りまげるように揉みこむ。

「……うう……で、でも、いいんだよね？　八雲は、マゾおっぱいをブラ下げているんだから……そうなっても仕方ないんだよね？」

ぷっくりと腫れていた乳頭が、さらに充血して赤くなる。口調も明らかに、呂律が回らなくなっている。

「ああ、いいんだ。その胸は俺の『作品』なんだからな。まだ反応が鈍いくらいだ」

「あああ、ああ……」

淫らになってもいい、いやらしくなっても仕方がない。先輩は敵の淫魔から堕落の免罪符を与えられて、だらしなく笑みくずれる。充血のあまり下膨れになった唇を半開きにし、

その端から熱々の涎を垂らす。

「どうした？　もっと淫らな乳房にされるのはいやなのか？」

「……あああ……ちがうの、いやなんじゃなくて……う、嬉し」

「まあ、いいさ。こうすれば、おまえはすぐ気を変えるからな」

シャドウは先輩の言葉を遮り、男の腰よりやや低い位置に掲げられたふくらみに両手を伸ばした。券売機から食券を抜きとるような手つきで、その頂きに屹立する突起を摘んだ。

「ひーっ！」

先輩は思いきり背を反らし、絹裂きの悲鳴をあげた。淫魔の指は、ほっそりとした外見とは裏腹にペンチじみた力で乳首を押しつぶし、右に左に捻り始めた。

「くひいっ、ひいっ！　きひいーっ！」

女退魔師は魂を握られているような絶叫を放ち、崩れた顔を左右に振った。真っ赤な眼帯が薄暗闇で踊っているさまは、弱ったチョウが必死で逃げまわっている姿を連想させた。

先輩はすぐ、髪の生え際や首筋に汗を滲みださせた。二の腕やエナメルで区切られた脇腹に、粟立ちを生じさせた。それでもよく躾られたイヌのように、チンチン姿を守り続けた。大開脚の膝が震え、ハイヒールの細い踵がカツカツと鳴った。

「……こんなふうに虐められて嬉しいだろう？　もっとスケベな乳房にして欲しいだろう？」

「うひいっ、ひいいっ！　う、嬉しい！　して欲しい！」

「おまえはこれから、ニプレスなしでは歩くこともできなくなるんだ……いや、ただ胸が揺れるだけでもイキそうになるから、スポーツブラか何かで保持しないかぎり何もできない。レースのブラジャーなんて絶対着られない」

「ああ、そこまで……ひいっ、だめっ！　つ、爪を立てるのはだめぇ！」

「電車に乗ったら、痴漢たちの玩具だ……」親指の爪を乳首の根元に喰いこませて、「昔のおまえはどんな男にだって負けなかっただろうが、これからは乳房をつかまれただけで、腰砕けになってしまうんだ」

復讐鬼だった女は、憎き敵から自分の堕ちゆく先を告げられて縦長のヘソを泳がせる。桃色に染まった内腿を物言いたげに震わせる。

「ひ、ヒドい……なんていやらしい……」

吐息の生っぽさからいって、きっと両目を潤ませているのだろう。眼帯のせいで確かめられないけれど、一薙ぎするだけで淫魔を金縛りにかけてきた視線は、恋人から睦言を聞かされた乙女のそれになっているのだ。

「わかったか？　わかったら、さっさとイケ！　おっぱいマゾぶりを見せてみろ！」

シャドウは私の方に首を捻じまげ、先輩の乳首を思いきり引きあげた。洗濯槽から両手で洗い物を摘まみだすみたいに、荒々しくモノあつかいした。

愛撫を吸って下膨れになっていた脂肉の塊が、パン生地のように伸ばされる。そのボリュームにふさわしい、圧倒的なロケットになる。淫魔はふくらみの底面積がわかるまで引きのばすと、肉鋏（ニクバサミ）の両手をおもむろに振った。

「……い、イクウッ！」

乳首を起点として前後に振りまわされた乳房が、その生白い身を太りすぎのシャクトリムシみたいにうねらせる。暴力と重力と脂肉の流動とをせめぎあわせて、男性だったら思わず脈拍を早めてしまうだろう肉のスペクタクルを披露する。

「八雲、また！　ま、またイクッ……イッちゃう！」

胸板上の一幕は、舞台あいさつのようなものにすぎない。乳房のうねりは汗だくの胴に伝わり、アバラや腹筋の影も浮きしずみさせる。たくましい肩と窮屈そうな腿が、泣き虫

の頬のように震える。上の口からは涎、下のからは恥辱の証が垂れる。

「こんな責めで精を遣るなんて、正真正銘の変態だな」

「だって！　だって気持ちいいの！　おっぱい良すぎるのぉ！」

まったく反論になっていない。それどころか、自らの変態性を積極的に認めている。乳房をのたくらせ、尻たぶを躍らせてマゾ根性の根付きぶりを誇っている。

「ははは、そうか。いいぞ、遠慮なくイケ！　おっぱいを虐められることしか考えられないバカになってしまえ！」

「あーっ！」

表向きの顔からは、想像もできない艶声だった。高く透きとおりながらも、ジメジメしたものを残していた。

「ああっ、イク！」

理性は飛んでいるけれど、自意識は消えていない。自分は女退魔師なのに、淫魔に犯されている。斬りころすべき相手に性器を弄られて、女の極みに導かれている。なんて矛盾した状況、救いがたい屈伏劇だろう。そうした自己憐憫に浸り、被虐的な悦びにうち震えているのだ。

「イクッ、イクゥッ！　や、八雲っ、もうバカになってる！　頭のなかがおっぱいで満たされちゃってるの！」

シャドウは釣り竿を操るように、ビクつく乳首を振りまわす。前後左右、乳房の付け根が真っ赤に浮きあがるまで淫虐の限りを尽くす。さらに親指を動かして、肉の摘まみも捻りころがす。

「……ッ！」

私は思わず、顔を背けた。アレがどれだけ効く責めなのか、私は昔食べた料理のように

思いだせる。これ以上見続けていたら、いまは何もされていない私の突起まで、ジンジンと疼き始めてしまう。

「イクッ！　イクッ！　イクッ！　……イックウッ！」

胸のことしか考えられなくなった女は、雷に撃たれたかのように背筋を反らした。バランスを保てる限界以上にしならせ、ハイヒールの不安定さもあって後ろに倒れた。淫魔はギリギリまで粘って手を離し、おっぱいマゾを仰向けに寝かせてやった。

「……くああ、ああああ……ああ……」

八雲先輩はひっくり返されたカエルの態で、喉や腹をヒクつかせる。折りたたんだ肢を時折ピン、と伸ばしかけては、慌てて元に引きもどす。鎖骨のくぼみには、早くも粘っこい汗が溜まっていた。吐息はどんな戦闘時よりも激しく、かつ匂っていた。

私たちには縁遠い匂い。女という性が持つ天然の甘みと臭みが混じった匂いだった。

「……いつまで寝てるつもりだ」

淫魔は革靴をあげて、M字のまんなかを踏みつけた。エナメルバンドに挟まれて盛りあげられた陰部を平らにならした。

「あっ、イクッ！」

胸絶頂の余韻が残っているらしく、先輩は冒涜的な気付けでも達してしまった。もう疑いようもなかった。

本当にマゾなんだ。

淫魔の牝奴隷なんだ。私は声を出さずに泣いた。涙腺が壊れてしまったみたいに、ハラハラと泣き続けた。

「くふぁっ、ふああ……す、すみません……！」

堕ちた女狩人は、いそいそと頭を起こした。エサを待つイヌそっくりの忠実さで、また蹲踞のポーズを取った。

「立て。よし、足を軽く開け。両手を頭の後ろで組みあわせろ」

新たな屈伏の姿だった。上半身は胸を反らし、肘を掲げて脇のしたをさらしている。一般人でも複雑な凹みを見せるそこは、肩まわりの筋肉がよく発達しているおかげで、凄みを思わせる暗がりになっている。並外れた乳房との組みあわせは、同性でもエロスを感じさせられる。

胸からしたは、ボンデージとハイヒールによって人工的に秩序立てられ、女神のプロポーションを与えられていた。腰の縊れは誇張され、ムッチリとした尻たぶは逆ハート型に引きあげられ、脇腹から足首にいたるまでのシェイプは見ているだけで悩ましい曲線を描いていた。

胸の大きさに隠されてしまっているだけで、スタイルのいい人だとはわかっていた。でも、これほどエロティックなカラダつきをしているとは思ってもみなかった。童貞男だっ

たら、きっと足を撫でまわすだけで発射してしまうにちがいない。

「ふふふ、いい格好だな」淫魔はまた、私を見やってきた。「おまえの望みどおり、乳房を調教してやる……何をされても、その格好を崩すなよ」

「はい、わかりました……」

ハイヒールで立ちつくすのは、馴れていてもかなり苦行だ。ましてや私たちのような戦う女、貞潔を強いられる退魔師が、媚態の小道具に親しんでいるはずもない。

八雲先輩のすらりと長い足は、早くも震えだしていた。それが柔らかな曲線に肉質の緊張感をもたらして、いっそう淫靡なものに仕立てあげていた。

「……ふあ、ああ……はあ、はあぁ……」

しかも先輩は、何もされていないうちから喘ぎだしていた。目隠しで視界を閉ざされているので、気を抜くとすぐ、自分の淫欲世界に没入してしまうらしかった。次はどんな責

めをしていただけるのだろう、どれほど気持ちよくなれるのだろう？　小鼻を広げ、何度も唇を舐めまわす。脇や内腿に汗を噴きださせる。

「そうモノ欲しそうにするな。すぐにキツいのをくれてやる」

シャドウはワイシャツのカフスを外し、袖を捲りあげた。八雲先輩ではなく私に向かって右手を広げ、ひらひらと振ってみせた。

「いくぞ、マゾ牝！」

大きく背後に振りかぶると、サイドスローのピッチャーを思わせるしなりを利かせて、待ちわびている女の左乳房を平手打ちした。

「……あーっ！」

鞭の一閃といってもおかしくない、痛烈な一撃だった。長身で体格の良い先輩が、風に吹かれた柳のように傾き、馴れないヒールに足を取られてよろめいた。

「その格好を崩すな！」

「は、はい！　もうしわけありません！」

先輩はすかさず謝ったものの、肩をブルブル震わせて、こみあげる痛みを押しながそうと努めている。

「……うあ、ああ……あああ……」

絶頂を貪って膨満中の乳房に、シャドウの手形が浮きあがる。暴力の痕跡がじわじわと露わになっていくさまは、快楽に染まっていたふくらみが痛みの刺激によって塗りかえられていくようだ。

「ふふふ、痛いか？」

「……はい……痛いです……あっ？」

淫魔は左手を伸ばして、こらえる女の前髪をわしづかんだ。自分のそばに引きよせ、顎をあげさせると、

「ちがうだろう、マゾ牝？　『痛い』んじゃなくて……『イキそう』なんだろう？」

かたちの良い耳に囁きかけて、耳朶を甘噛みした。

「あっ、ああっ！　……は、はい……そうです……そうでした……ああ、ああ……」

「なら、次からどうすればいいのか」耳殻を舐め、耳の穴に舌を差しこんで、「言わなくてもわかるな？」

「……ああ、ああ！　……はい、わかります……」

「よし、いい娘だ……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/